

如来蔵・仏性思想の問題点

如来蔵・仏性思想を説く経典として『如来蔵経』『勝鬘経』『大乘涅槃経』『楞伽経』など。論としては『宝性論』(Sthiramati?) 『仏性論』(世親 Vasubandhu) 『大乘起信論』(馬鳴 Aśvaghoṣa?) 『撰大乘論』(無著 Asaṅga) など。

如来蔵思想・仏性思想とは何か

衆生のうちには、仏・如来、あるいは仏と違わない本来清らかな心(自性清浄心)が宿っており、客塵煩惱(āgantuka kleśa)によって覆われているが、その覆いを取り去ることによって成仏が可能となる、という思想。

tathāgata-garbha (如来の子宮・母胎)。

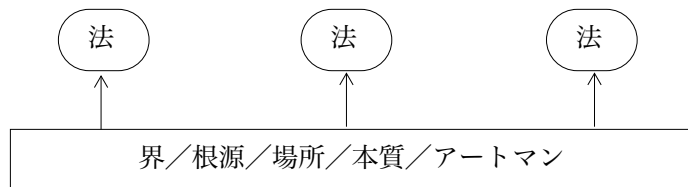
buddha-dhātu (仏の基体・界・根源的存在)

buddha-gotra (仏の種・姓)

× 「仏の性質」「仏の本性」「成仏の可能性」

○ 「仏を生み出す基体・母体」「仏となる種」

如来蔵思想(dhātu-vāda)の構造(松本史朗氏の作図をアレンジ)



如来蔵・仏性思想は異端か

仏教は無我説、すなわち、唯一の根源的実在を認めない。しかるに、"dhātu"なる語は、根源的実在・諸法の発生根拠という意味をもち、そのようなものを認めることは無我説に反する。

また、如来蔵思想とウパニシャッド哲学との類似性が指摘されている。ウパニシャッド(ベーダーンタ)とは、釈尊が批判した対象に他ならないから、これが反仏教思想であることが結論される。

如来蔵・仏性思想は平等思想か

大乘涅槃経にある「一切衆生悉有仏性」を単純に「一切の衆生は成仏の可能性が有る」とか、平等思想の宣言だとみなしてはならない。この文言の後には必ず、「一闍堤(いっせんたい、icchantika)を除く」という語が付加されていて、「一闍堤」と呼ばれるある種の人々は、永久に仏に成ることができない、という差別的な立場

が明記されているからである。

これは無量寿経第18願の「唯除五逆誹謗正法」と同じ趣旨ではない。本願の唯除規定は、善導によれば、

- ①罪を作らせないために方便として「除く」のであるが、真実には五逆も謗法も救われる。(抑止)
- ②既につくってしまった罪については、その罪に苦しむ者を見捨てることはしない。ただし、「回心」を必要条件とする。

のであって、固定されたものではなく、行ないに対していわれていることである。これに対して一闍提は無姓 (agotra) ともいわれ、行ないに関係なくはじめから成仏の可能性を一切持たないもの、ということである。大乘涅槃経によれば「一闍提者斷滅一切諸善根。本心不攀縁一切善法。」「五逆罪誹謗正法及一闍提」とあるように、一闍提とは、仏教で最も重罪とされる謗法とは別の〈ある種の人々〉を指すのは明らかである。

「～すれば必ず救われる・成仏する」というときの条件は宗教にとって本質的なもので、無条件で救われるなどということとはあり得ない。これは「一切皆成仏」を説く法華経も同じ (法華経を受持することが成仏の条件)。しかし一闍提はいかなる善業を積みえないような人々のことだから、彼らの救済はありえないことになる。この点、法華経の平等思想が涅槃経に影響を与えたという説には賛同しがたい。

差別即平等のレトリック

唯識法相宗では「一切衆生悉有仏性」を批判して「五姓各別説」を立てる。衆生には五種類の先天的な能力の違いがあり、覚ることのできない人がいる、というもの。これに対して、最澄は法華経の一乗主義 (三乗方便一乗真実) に基づき、「人はだれでも仏になることができる」と批判した。この両者の論争は長期に続いたが、実際には、最澄 (天台宗) がその後の日本仏教の主流を形成した。

しかし、最澄が平等主義者であり、徳一が差別主義者であった、と単純にいうことはできない。なぜならば、現実には差別は存在するからである。徳一はその現実を認めたりアリストであった。最澄は、現実には存在する差別を、平等だと言いくるめて差別の存在を認めないだけ、ともいえる。両者の違いは、分かりやすい差別主義／分かりにくい差別主義、の違いに過ぎない。

差別即平等のレトリックは、「原理的な同一、無差別を言うことによって、かえって現実の差別を肯定し、絶対化する」ことにある。

小川一乗氏の如来蔵・仏教思想解釈

仏教が縁起・無我説であって実体を認めない、という点では松本氏に同じだが、本来の如来蔵思想は縁起・空思想の延長線上に有るという立場で、両者を対立するものとみる松本氏とは異なる。

< 仏性思想の一般的理解 > (中国・日本における)

仏性・如来蔵といわれる何らかの清浄なものが、一切衆生の本質として存在して

いる（一切衆生悉有仏性）。仏性とは「仏の自性」（buddha-svabhāva*）であり、この故に成仏・涅槃が可能となる。「心性清浄」「自性清浄心」（=菩提心）なる一種の性善説。

*このサンスクリットは、漢訳大乘涅槃経のチベット重訳をサンスクリットに還元したもの。これによって、中国における仏性理解がどのようなものであったかをわれわれは知る。

<仏性思想の本来の意味>（インド大乘における）

「心性清浄」＝「心は本性として清浄である」（prakṛtyā pariśuddhi）＝「心は本来・もともと縁起空である。」これは心なるものの実体性を否定している。

このような意味に解しているのは、スティマラティ（安慧）やチャンドラキールティ（月称）の注釈書のチベット訳による。

すなわち、小川氏によれば、如来蔵・仏性思想はインドにおいては正しい仏教を受け継いでいるが、それが中国に入った段階で逸脱する、ということになる。

これに対しては根本的な疑義が有る。小川氏が依拠したのは『宝性論』であるが、この論書は、仏教徒にとって根本的な拠り所である三宝は「界」（dhātu）を因として生じるといふ。これは三宝よりも法界を重視しているのであり、これを仏教であるとは認めることはできない。

また、縁起空が事実判断であるのに対して、清浄は価値判断であり、両者を等しいとみなすことは論理的な必然ではない。後付けの理論と言われても仕方あるまい。論理的に言えば、清浄(pariśuddhi)と縁起(pratītya-samutpāda)空(śūnya)とは全く別の概念である。（阿頼耶識についても同様に後付けの理論ではないか？）

真宗における逸脱の例

「善と言えほどのことを為すことは難しい。否、親鸞も言ったように、悪性はなかなか止められないのが人間という生き物なのだろう。しかし、そんな自分をことさら貶めるのではなく、むしろ、善悪のはからいを捨てて、真理に目覚めた人（覚者）となるよう勧めているのが仏教であり、その時、われわれは生死の流れ（六道輪廻）を渡って涅槃の境地（浄土）へと趣く。しかし、そのためには「浄土を得んと欲せば、当にその心を浄むべし」とあるように、心を統一し、自らの心の本性（自性清浄心）を知るのでなければならない。」

「浄土を得んと欲せば、当にその心を浄むべし」とは維摩経の文言。心を統一せよ、とか、自性清浄心を知れ、というのは臨済禅のさとりかもしれないが、真宗からの逸脱であるばかりでなく、仏教からの逸脱である。パーリ経典や初期大乘経典では、心が本来清浄であるとは言わない（アングッタラニカーヤにはそれに近い記述があるが、後世の付加であるとも言われている）。「心は不安定なものだから注意して悪に赴かないようにせよ」というのが釈尊が常に説いたことだったろう。

心性本浄説

この説の由来は、定説をみない。いずれにしても、如来蔵・仏性思想は中期大乘経

典に表れ、初期大乘経典（般若経、法華経、阿弥陀経、宝積経など）には見られないことは注意されねばならない。このことの意味は、やはり初期大乘から中期大乘に思想的変化があったということであり、縁起・無我と如来蔵・仏性思想との間には連続性ではなく差異をみるべきであろう。すなわち、空から有へと軸足をずらしたのである。そしてこれは中観派と唯識派との差異でもある。

また、善導の〈機の深信〉論「決定して深く、自身は現にこれ罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかたつねに没しつねに流転して、出離の縁あることなしと信ず。」が心性本浄説と根本的に対立することにも注意したい。

仏性内在論と仏性顕在論

「一切衆生悉有仏性」を説く大乘涅槃経では「如来常住無有変易」や「常楽我浄」をも説いていることに大きな問題がある。秋月氏は、「いわずもがな」「経典にある言葉だからといっても否定して構わない」という。道元は「一切は衆生なり、悉有は仏性なり、如来は常住にして、無にして有にして変易なり」（正法眼蔵・仏性）と読む。もちろん漢文の読み方としてはまちがっているというべきだが、道元にとってはそのように読み替える必然性があった。つまり仏性を人間に内在する実体（仏性内在論）とはみずに、一切は仏性のあらわれだ（仏性顕在論）というのである。

「無常、苦、無我、不浄」か「常、楽、我、浄」か

小乗仏教では前者を、大乘仏教では後者を覚りの内容とする、というのはまったくのでたらめである。こういうことを主張する仏教者は、前者は現象世界の真理であるが、それを超えた真実在の世界があって、そこでは後者が真理である、という。これは仏教にとっての危険思想・異端思想である。現象の背後に真実在を想定するのは、仏教以外の諸々の宗教である。インドにおけるそれらの宗教（外道）を根本否定して仏教は成立したのだから、真実在を認めたら仏教の根底が崩れる（その極致が密教）。そもそも、釈尊が問題にしたのは「現象世界のみ」であって、それを超えた世界については全く判断停止（無記）したのである。仏教が反形而上学といわれる所以である。

修道論の問題

如来蔵思想の修道は、不浄な肉体から靈魂を離脱するための苦行主義と結びついている。これはもちろん、苦行を否定した仏教と対立する。仏教の修道は、聞・思・修（まず聞き、次に考え、実際に修行する）をくりかえして智慧を完成させていくことで、最初に完全円満なるものがあってそれを顕現させることではない。一生懸命修行して煩惱をふりはらうのではない。

（参考）サムイェーの宗論における中観派と如来蔵思想の対立

チベットにおいて8世紀の終わり頃、カマラシーラと摩訶衍との間になされた公開討論。